

## 「わらいす直しの女」(モーパッサン)

さる町に邸を構へる侯爵家の晩餐會の席上、人は人生に一度しか眞實に戀愛出来ないものか、それとも何遍も出来るものかといふ議論が持上り、意見を求められた老醫者が、自分は五十五年間一日も休まずして「死によつて始めて終焉をつげた情熱」を知つてゐると云つて、藁椅子直しの貧しい老婆が町の藥劑師の男に寄せた直向きな情熱について物語る。三箇月前、彼女は臨終の床で醫者に遺言執行人となる事を頼み、己が生涯について實に「いたましい話」を語つたのだといふ。

彼女は藁椅子直しの貧しい兩親と共に、幼い時分から「いすの直しはよろしう！」と叫びつつ、蝨のたかる汚い恰好で方々を流浪してゐた。行く先々の子供達は、乞食の子なんかと口を利くなど親に嚴命されてゐるから、友達になつてくれないし、男の子から石を投げつけられもしたが、時に駄賃に銅貨を貰ふ事があると、大事に藏つて貯へてゐた。十一歳になつた或日、町の

藥劑師の息子が友達に小錢を取られたとて泣いてゐる處に行き逢つた。彼女はブルジョアの子弟の泣く姿に動顛して、貯への全部を少年の手に握らせると、彼が受取つてくれたので、嬉しさの餘り抱きついて接吻するや、一目散に逃げ歸つた。

その後、彼女は各地を放浪しながらも再び少年に會つて心ときめきを味はひたいと冀ひ、親の金を盗みさへして貯へを拵へ、町に戻つて少年に回り遭ふと、全財産を握らせ、受取つた少年を思ひの儘に愛撫する。さうして四年間、貯への全てを注ぎ込むが、少年も「接吻に同意を與へる代償として」金を受取り、彼女が來るのを心待ちにする様になる。が、やがて少年は中學に入り、二年間會はないでゐる裡に別人の様に成長し、彼女を見ても素知らぬ顔をする様になる。彼女はひどく苦しむ。やがて兩親が死んで了ひ、獨りで商賣を續けてゐたが、また町にやつて來ると、藥劑師の息子が親の店を繼いで結婚した事を知る。彼女は自殺を圖るが、助けられて彼の店に擔ぎ込まれる。馬鹿な眞似をするな、と突慳貪に云はれるが、男が口を利いてくれただけで彼女は「ながいこと幸福」だつた。

爾來、彼女は藥劑師の店で買物をして男に金を注ぎ込む一方、儉約をして二千フラン餘りの金を貯め、男に渡してほしいと遺言して死ぬ。醫者が男の店に行き、老婆の直向な愛情を傳へると、藥劑師の夫婦は、あんな乞食婆さんに愛されてゐたなんて、名譽に關はるとして激怒する。

が、醫者が遺産の話を持出して、それなら遺産は貧民に施す事にしませうか、と云ふと、夫婦は狼狽して暫し言葉を失つた後、老婆の「最後の意志」を斷るのは憚られると云つて、金を受取るのであつた。

老婆の傷ましくも純粹な愛情は感動的だし、吾々讀者は無論老婆に同情する。藥劑師夫婦が遺産を貰ひ損ねかねないと知つて狼狽する場面に讀者は溜飲を下げるであらう。だが、この作品に限らず、「シモンのパパ」や「ジュール叔父」等、モーパッサンの優れた短篇を読む度に考へさせられるのは、世間に蔑まれる哀れな主人公達に同情する吾々自身の心中を覗いてみれば、多かれ少かれ我欲や因襲や偏見の奴隸たる俗人共がそこに確實に棲息してゐるといふ事である。老婆よりも藥劑師の徒の方が遙かに吾々に近いのだ。トルストイはモーパッサンを論じて、「女の一生」の作者は「なぜ、なんのために美しいひとが滅びたのか？ これはなぜ起こつたのか？ と問ひただしてゐるかのやうである」（中村融譯）と書いたが、この作品についても同様の事が云へよう。人間性が變らぬ限り、「美しいひと」が報われぬ世の中は未來永劫なくなりしぬ。

（杉捷夫譯、「世界文學全集」十六、河出書房新社）